

ゆずり葉の 木漏れ日

<特別支援・発達支援>

2026年3月15日発行
第6号

<http://www.yobokyoiku-academy.com/>

「困りごと、いろいろ」

— 教員、支援者、それぞれの困り感とは —

教育現場や療育など、子どもを支える場はそれぞれ異なっているけれども、健やかな育ちを願う私たちの想いは共通しています。本号では、子どもと向き合う専門家が、日々の実践のなかで抱える「困りごと」に光を当てます。立場や制度の違いを越えて、現場の想いをもち寄り、迷いや葛藤、手応えや工夫を分かち合うことで、孤立をつながりへ、課題を学びへと変えていくことを目指します。

現場のリアルな言葉を起点に、対話と協働の一步をここからどうぞご一緒に！

「今の子ども」に向き合う重み

小学校教員 仲西 佑香

異動して1年目の今年。理想と現実がこんなにも違うのかと、打ちのめされる毎日でした。今年度は理科と音楽の専科。学級には多様な背景や特性をもつ児童が増え、誰かしら着席できず、関係のない話を大声で挟むなどの姿が毎時間のように見られる学級が複数ありました。10年前とは明らかに子どもの質が違う。待てない。じっとできない。衝動的。社会性の発達に必要な時期にコロナでマスク生活だったこともあるのでは？と個人的には感じています。言ったもん勝ちの空気、すぐに「ムリ」と言い取り組もうとすらしめない児童らに対し、それでも興味を引き付け主体的に学習に向かえるようにと工夫しようにも、トライ&エラーが、トライ&エラーエラーエラーって感じでした。もちろんそんな中でも頑張ろうとする子もいます。でも全体の空気がもう、楽なことに流れていく。ただ、ICTを使っただけのクイズとNHK for schoolのいくつかの番組だけは、どの学級にも夢中になっていました。「今の子どもたちでも夢中になれること」を探していくしかないのかなと、これからも子どもとの根競べが続きそうです。

医療機関との連携について

学校保健 吉田 智子

高校で養護教諭をしておりますが、精神科との連携が以前と比べ増えたなと感じております。学校にスクールカウンセラーが常駐するようになり、心理領域がぐっと身近になったと感じる生徒、保護者そして教員が増えました。精神科への通院や安定剤・眠剤の服用に対する敷居が低くなったのも確かです。一方、心療内科・精神科の初診予約がとてども取りにくく困っております。勤務校周囲のエリアは3か月待ちあるいは、初診の受付を中止している医療機関も少なくありません。今診ていただきたいと思い、保護者へ受診勧奨しても医療に繋ぐことができない状況があります。そんな時は、一旦、近所にあるかかりつけ内科の受診を勧めています。必要であれば精神科への紹介受診に漕ぎ着けることができます。いざという時、医療との連携がスムーズに取れるよう今後も模索していきたいと思っております。

日々変化する子どもに、支援をどう合わせるか

児童発達管理責任者 青木 直人

現在、約30名の子どもの個別支援計画を作成する中で、一番の悩みは「正解が一つではない支援を、どう組み立て続けるか」です。子どもたちは日々成長し、家庭・園・学校など環境も変化します。幼稚園でつまずきと小学校での困りごとは同じ子どもでも姿が違い、その人の数だけ事例があり、答えも多様です。さらに相談や学校支援の依頼が重なると、目の前の課題に追われ、立ち止まって振り返る時間が取りにくくなります。それでも、私たちは歩みを止めず、今できる工夫や成功体験を積み上げていくしかありません。小さな工夫や成功体験、迷いの共有が次のヒントになります。

学校における真の働き方改革とは

小学校教員 岸 太平

地域の方から、「児童の遊び方が気になるので、学区内の公園の見回りをしてほしい」と依頼があった場合、学校は、勤務時間外に対応する必要があるのでしょうか。働き方改革は、教員の働きやすさに加え、「子供のため」という視点を含んでいます。早期の問題解決が、大きなトラブルを防ぎ、子どもの成長を支え、結果的に教員の負担軽減につながる可能性もあります。地域で子供を育てるのであれば、学校こそ地域の一員です。一方で、こうした考え方が圧力となり、使命感に依存した働き方を助長する危険性も理解しています。教職には白黒つけられない問題が数多く存在します。全ての問題に学校が口を挟むべきとは思っていませんし、全ての問題を教員が解決できるとも思っていません。それは傲慢であり、そうした考えはときに子供を隅に追いやってしまいます。

学校教育の範囲とは何か。働き方改革の本質を見失わず、今後も丁寧に考えていきたいと思っています。

こんな時、どう関わる？

大学教員（特別支援教育） 尾関 美和

集団で歩く活動の場面で、みんなが輪になって歩いている中、一人だけ猛スピードで走り回ってしまう子どもに出会ったことがあります。「歩こう」と何度声をかけても、みんなより早く走ろうとし、みんなと同じ行動をとることができませんでした。どのように声をかければよいのか、どのように関わればよいのか、戸惑いました。

教育や保育の現場では、このように子どもの行動への対応に悩む場面が少なくありません。目の前の行動だけを見るのではなく、その背景にある発達をどのように捉えていくのか、また教員の意図を子どもにどのように伝えていけばよいのか。子どもに向き合う中で、私自身もその難しさを感じ続けています。

「困りごと」について

児童発達支援放課後等デイサービス指導員 畑下 眞修代

活動の中で、自分の気持ちが言えない、したくない気持ちや困った事に直面して「泣く」「拗ねる」「動かない」など全体の動きをストップさせる行動に出る児童がいる。

では、どうするか。1つは現実場面向への対応。困った行動がある時は、その場から離れさせ「落ち着くまで違う場で待つ」というスタンスを保つ。もう1つは、その子のアセスメント。1~2週間記録を取り、問題行動に見られる本児の特性を探った。どんな場面にどんな行動があったかを記録して振り返る。結果、思っていた以上の理解の低さ、できなさ感からの回避行動、見通しが持てない事への不安感などが分かってきた。そこで環境調整や同じ視点からの言葉かけなどをチームで行い、少しずつの変化や改善が得られた。

今回、現実場面向とアセスメントで、多くの事に気づけた事は成果である。今後も『1番困っているのは当事者である』事を忘れず、チームで取り組んでいけたらと思っている。

各現場の“困り感”をうけて

「人が足りない」問題について、先日、全国で公立学校の教員が3827人不足しているとの調査結果が報告されたが、実際にはもっと多いと思われる。

昨年の夏に、現場の校長と学校の抱える課題と支援について話し合った。

その中で、学校の働き方改革について、

「学校と教師の業務の3分類」 https://www.mext.go.jp/content/20250926-mxt_syoto01-000045031_06.pdfが話題提供された。「困り」を抱える子どもと向き合うためには、教師がすべき事に専念するため、学校と地域の協力し合う関係づくりと双方の意識改革が必要だと思う。



予防教育科学アカデミー理事 堀川 富美

予防教育科学アカデミーでは、子育てや教育上の困りごとの相談を常時メールにて受け付けています。皆さまからのご相談に応じて専門家がご答えいたします。下記までどうぞご相談ください。

ご相談窓口：yobokyoiku.academy@gmail.com（お名前は必ずご記入ください）

【お問い合わせ】

特定非営利活動法人 予防教育科学アカデミー <http://www.yobokyoiku-academy.com/>

